

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：35414

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K11495

研究課題名(和文) 誤嚥を防ぐポジショニングと食事ケアの技術伝承

研究課題名(英文) Promotion of positioning skill development to prevent aspiration during

研究代表者

迫田 綾子 (Sakoda, Ayako)

日本赤十字広島看護大学・看護学部・客員教授

研究者番号：70341237

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：1年目はベッド上、車イスのポジショニングスキル評価表作成、視聴覚教材をホームページで公開した。技術伝承は、摂食・嚥下障害看護認定看護師所属の12施設で実施した。研修参加は150名、調査協力は67名(回収率44.7%)であった。ポジショニング研修経験は初回が76%、摂食嚥下障害患者への食事介助ができる者は5%であった。ベッド上ポジショニングは「できる」者は研修前52.2%、研修直後90.6%、2週間後56.2%、3か月後50.5%であり、伝承に併せて定着化が課題であった。最終的な技術伝承は看護師650名、24都道府県に広がった。今後POTTプロジェクトとして伝承を継続する。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was promotion of positioning skill development during meal care to nurses and to verify the effect. In the first year, we created a positioning skill check table on the bed and wheelchair, and released audiovisual teaching materials on our website. Skill development was carried out at 12 hospitals nationwide to which dysphagia nurses belonged. There were 150 participants in the first training and 67 people in the survey. The result was 76% of the no initial training experience in training and 5% of nurses were able to support meals for eating dysphagia patients. In the evaluation of the positioning skill on the bed, 52.2% before training, 90.6% immediately after training, 56.2% after 2 weeks, 50.5% after 3 months. Results suggested the need to continue training. Finally, were able to skill development to 650 nurses, 24 in prefectures. Continue activities as a POTT project in the future.

研究分野：基礎看護学

キーワード：誤嚥予防 ポジショニング 技術伝承 食事ケア POTTプログラム

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

高齢者の死亡原因の第一位は肺炎で、不慮の事故の第一位は窒息である。いずれも食事に関連するものであり、適切な食事ケアが求められている。肺炎の中でも誤嚥性肺炎は、摂食嚥下障害が主な原因であり、再発を繰り返し徐々にADLやQOLを低下させ平穏な人生を脅かす。適切な食事時のポジショニングは、誤嚥を軽減ないし防止し食事の自立を図ることを目的とする。具体的には、体幹を安定させ、嚥下障害を改善するための代償法、胃食道逆流防止等のリスク管理が含まれる。研究者らは、看護技術開発として平成21年から「誤嚥を予防するための食事時のポジショニング教育モデルの構築」に関する研究を開始した（基盤C課題番号21592733）。

平成24年からは「誤嚥を予防する食事支援のためのポジショニング教育スキームの汎用化」として研究を継続した（基盤C課題番号24593274）。ポジショニング教育モデルは、POTT（ぽっと）プログラム（ポジショニングで食べる喜びを伝えるプログラムの略称）として構築し、摂食・嚥下障害看護認定看護師と共に9施設で技術教育と効果検証を行った。同プログラムは、コアナース中心に少人数で実施し、受講者が他の看護師に計画的に技術を伝承するものである。研究結果では、プログラムの効果は検証できたものの、従来の看護師の食事時のポジショニングは、研修の機会もなく不適切姿勢で誤嚥のリスクを増大させる状況が多くみられた。この状況は、全国でも同様の現象があると推察され、食事時のポジショニング技術伝承が急務と考えた。同プログラムは、口腔ケア、嚥下評価等の基本姿勢として応用可能である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、誤嚥予防のためのポジショニング及び食事ケア技術を看護職等に広く伝承し、その効果を検証することとした。ポジショニング及び食事ケア技術は、研究者らが構築したPOTT（ポット）プログラムを基盤として伝承する。

3. 研究の方法

(1) プログラム1

POTTプログラムの再構築、調査票・事前学習用視聴覚教材作成、ホームページ作成、摂食・嚥下障害看護認定看護師を対象とした研修会開催、研究参加者募集とした。

(2) プログラム2

ポジショニング研修会を開催し、効果・影響評価（調査1・2）。研究対象者は、摂食・嚥下障害看護認定看護師が所属する全国12施設の看護師。調査1は看護師の基本情報及び研修前後の認識や変化を調査した。調査2はベッド上及び車イスのポジショニングスキル調査票を基に、食前・食中・食後のスキルを「できる＝1点」「できない＝0点」で評価した。回答は、スキルの自己評価をホームページ内のグループウェアにアク

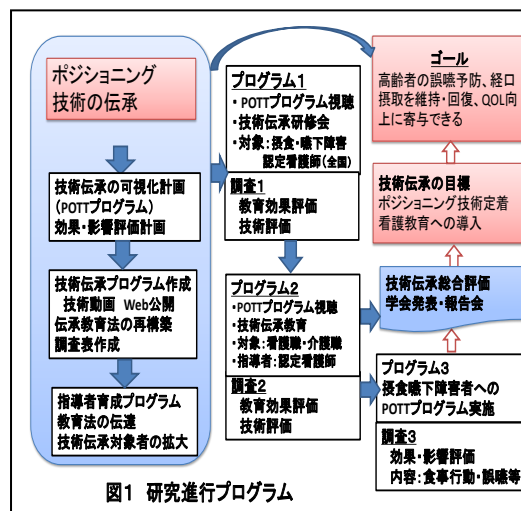


図1 研究進行プログラム

セスして個別に入力することとした。調査期間は、平成 28 年 3 月～29 年 12 月。倫理的配慮は、研究者の所属する大学及び対象施設に申請し、双方の承認を得た上で実施した。分析はベッド上・車イスのスキル評価点を記述統計とし、コメントは参考とした。

(2) プログラム 3

総括評価として、全ての対象施設で調査終了後、技術伝承に関するアンケート調査を実施した（調査 3）。調査期間は、平成 29 年 12 月～30 年 1 月。（図 1）

4. 研究成果

(1) プログラム 1

①事前学習資料及びベッド上ポジショニングスキル 25 項目、車イススキル 18 項目のチェック表（調査票兼ねる）を作成した。合格基準は、同プログラムが食事ケアとポジショニングの基礎技術のため 90%以上に設定した。

②視聴覚教材作成は、事前学習用としてポジショニングの基礎知識や POTT プログラムの内容等をホームページに公開。加えて研修会に関連する適時な情報提供をした。

③摂嚥・嚥下障害看護認定看護師 50 名を対象として POTT プログラムの技術伝承を行い、ポジショニングスキルの再検証を行った。研修終了後、任意での研究協力者の依頼をした。

(2) プログラム 2

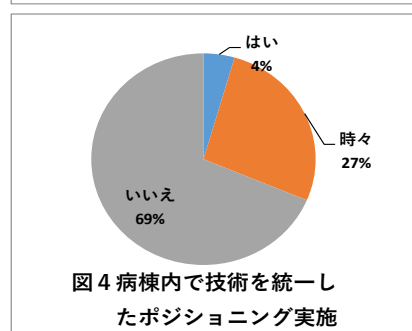
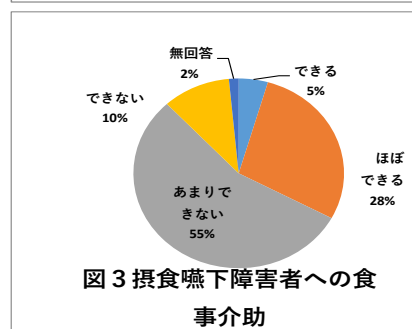
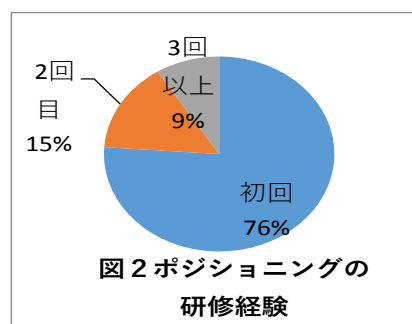
研究協力施設は、摂食・嚥下障害看護認定看護師が所属する 12 施設の看護師。病床数は 100～600 床、施設基準は急性期、回復期、老人保健施設であった。初回の研修会参加者は 1 施設当たり 7～15 名であり、12 施設の参加者総計は 150 名であった。調査の回答者は 67 名（回収率 44.7%）、経験年数は 13.2 年、平均年齢 32.8 歳であった。

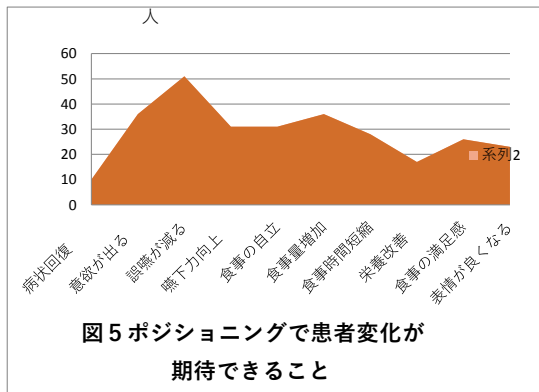
【調査 1】

① 看護師のポジショニング状況

ポジショニングの研修経験は、初回 76%、2 回目 15%、3 回以上 9%であった（図 2）。

研修前の技術は「摂食嚥下障害患者への食事介助」ができる 5%、ほぼできる 28%であった（図 3）。「所属病棟で統一したポジショニングを実施している」のは 4%、時々 27%であった。「適切なポジショニングをするために看護師に必要なこと」は、知識、アセスメント、技術力が高値だった。「ポジショニングを実施して期待できること」は、誤嚥が減る 85%、食事量増加 60%、嚥下力向上 51.7%、食事の自立 51.7%等であった（図 5）。「POTT 研修会での気付き」ありは 99%、「継続学習する」は 86.6%、「指導ができる」は 77.8%であった。体験学習は自己の技術を客観的に俯瞰でき、患者の苦痛を想起させて看護師のモチベーションの向上につながっていた。

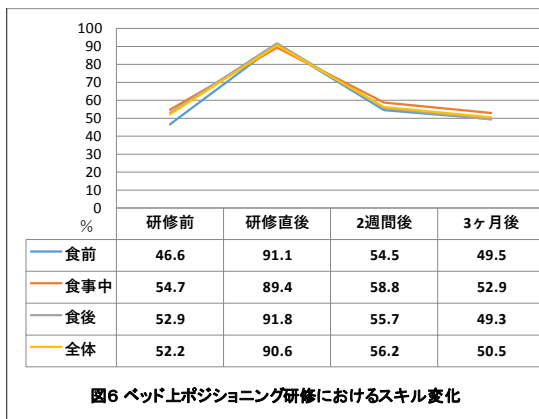




【調査2】

① ベッド上ポジショニングスキル評価

POTT スキルチェック表 25 項目全体では「できる」者は、研修前 52.2%、研修直後 90.6%、2 週間後 56.2%、3 か月後 50.5%であった。研修前後比較では、研修直後に「できる」者は増加するものの、2 週間後には低下し、3 か月後には研修前より低値となった(図6)。研修前にスキルが低い内容は、体幹両側を枕で密着 19.1%、足底を接地 12.8%、背抜き足抜き 27.7%、全体姿勢確認調整 29.8%であり、誤嚥のリスクが伴う技術であった。食事のスキルは、介助位置を適切に決める 29.8%、スプーン操作 34.0%であった。食後のポジショニングも誤嚥や安楽姿勢に関連するスキルが低値となっていた。研修実施直後のスキルは、少人数による体験学習の効果もありスキルは上昇し、参加者の感想でも自己効力感が高まる状況がみられた。



② 車いすポジショニングスキル評価

スキルで「できる」のは研修前 51.7%、研修直後 84.1%、2 週間後 58.9%、3 か月後 46.7%であった。研修直後には「できる」者が上昇するものの、ベッド上と同様に 2 週間後、3 か月後は低下した。低値のスキルは、車いすのたわみ補正、座面への座らせ方、脊柱伸展位の姿勢、両腕の調整、座面と大腿部の接触面の徐圧等であり、今後さらに強化が必要であった(図7)。

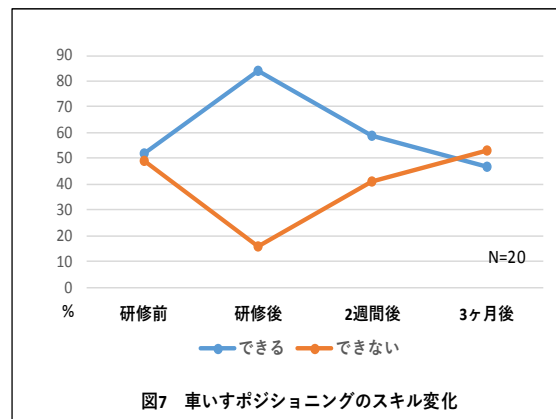
③ 患者への影響評価

看護師が患者へポジショニングをする条件は、スキルチェックの合格者に限定し、且つ同意を得た人へポジショニングを実施した。結果的には対象者は 13 名であった。主な疾患は誤嚥性肺炎、脳神経疾患、認知症、呼吸器疾患であった。ポジショニング後の病状変化は改善傾向 39%、変化なし 38%、悪化傾向 23%であった。患者に対するポジショニングは、看護師のスキル点が時間経過と共に低下傾向があり、対象が少なかったことが伺われる。今後はスキルの定着化を図り、患者への影響評価を継続する必要がある。

(3) プログラム3

【調査3】総括評価

① 技術伝承者数; 対象 12 施設での最終的な技術伝承者は、総数 650 名となり初回より 4 倍強となった。伝承方法は、施設内での研修会開催や定期的な学習会等を実施していた。



ただ初回の研修会に続き 2 回、3 回と継続して実施した施設があるものの、初回のみでの研修施設もあった。伝承が進んだ施設の取り組みは、チームで伝承計画を立てて実施、患者の良好な変化を共有する、使いやすい用具の準備（購入）、看護部や病棟師長等の管理者の支援等が影響していた。伝承が進まない理由は、スタッフのポジショニングへの関心の低さ、研修会ではやる気になっても実際面では活用しない（できない）、不足する用具、勤務交代や産休・育休により伝承活動ができない等が挙げられた。

③全国における技術伝承；研究者及び研究協力者による全国への POTT 技術伝承は、県内で 1 回実施は 14 県、2 回 6 県、3 回 4 県で合計 24 都道府県に広がった（図 8）。

(4) 技術伝承の継続のために

①ロジックツリー作成；調査 2 からポジョ

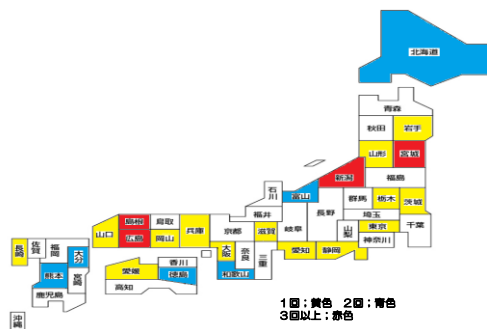


図 8 ポジョニング伝承地図

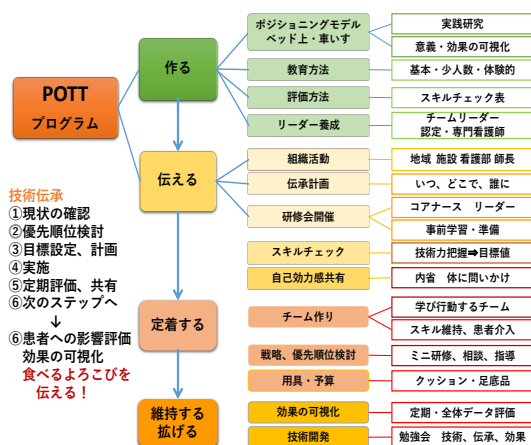


図 9 ポジョニング技術伝承・定着モデル

ニング技術伝承と共に、定着化のための活動が必要と考え POTT プログラムの進行を、「作る」「伝える」「定着する」「維持する・拡げる」プロセスを意図したツリーを作成し、報告会にて公開した（図 9）。

② 研究報告会；平成 30 年 2 月 10 日に開催し 80 名の定員、プログラムは 5 施設の先進的な実践報告及び車イスのポジョニングスキル研修を実施した。

③ 活動の組織化；技術伝承及定着のため「POTT プロジェクト」の名称で組織化を図った。北海道から九州までを 9 ブロック制としてリーダーを配置、学習会等を定期的で開催することとした。

④ ホームページ再構築；POTT プロジェクトに名称変更して、ポジョニングに関する情報提供やスキルチェック表公開（ダウンロード可）、研修会開催等を随時紹介するよう整備した。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 3 件)

(1) 迫田綾子、食事時の効果的なポジョニング技術、回復期リハビリテーション、査読なし、2018、pp31-36、

(2) 原田裕子、迫田綾子、食事時のポジョニングに対する看護師の認識と行動、日本赤十字広島看護大学紀要17： 査読有、2017、pp37-42.

(3) 迫田綾子、ポジョニングで食べる喜びを伝える POTT (ぼっと) プログラムの伝承、看護教育. 査読なし、2016. 57(10), pp810-816.

[学会発表] (計 10 件)

(1) 迫田綾子、ポジョニングで食べる喜びを伝える POTT プログラム技術伝承、第 37 回日本看護科学学会学術集会、2017. 12. 16, 仙台市.

(2) 原田裕子、迫田綾子、食べる喜びを伝え

- る POTT プログラム技術伝承 その 1. 第 22 回日本摂食嚥下障害リハビリテーション学会学術集会, 2016. 9. 24, 新潟市
- (3) 迫田綾子、誤嚥を予防する食事時のポジショニング教育スキーム. 第 34 回日本看護科学学会学術集会, 2015. 12. 5 広島市.
- (4) 迫田綾子、ポジショニングで食べる喜びを伝える POTT プログラムの汎用化. 第 13 回日本看護技術学会, 2015, 9. 11, 京都市.
- (5) 杉元公美子, 迫田綾子、食事時のポジショニング教育スキームの汎用化 6—内科病棟における POTT プログラムの実践評価—. 第 21 回日本摂食嚥下障害リハビリテーション学会学術集会, 2015, 9. 11, 京都市.
- (6) 中村清子, 迫田綾子、食事時のポジショニング教育スキームの汎用化 5—精神科における POTT プログラムの実践評価—. 第 21 回日本摂食嚥下障害リハビリテーション学会学術集会, 2015, 9. 11, 京都市.
- (7) 竹市美香, 迫田綾子、食事時のポジショニング教育スキームの汎用化 4—ポジショニング用足底接地シートの考案—. 第 21 回日本摂食嚥下障害リハビリテーション学会学術集会, 2015, 9. 11, 京都市.
- (8) 藤井光輝, 迫田綾子、食事時のポジショニング教育スキームの汎用化 3—ポジショニング教育プログラムの効果検証—. 第 21 回日本摂食嚥下障害リハビリテーション学会学術集会, 2015, 9. 11, 京都市.
- (9) 迫田綾子、食事時のポジショニング教育スキームの汎用化 2—POTT (ぽっと) プログラムの開発と教育方法—. 第 21 回日本摂食嚥下障害リハビリテーション学会学術集会, 2015, 9. 11, 京都市.
- (10) 迫田綾子、食事時のポジショニング教育スキームの汎用化 1—ポジショニング教育

スキームの構築—. 第 21 回日本摂食嚥下障害リハビリテーション学会学術集会, 2015, 9. 11, 京都市.

[図書] (計 1 件)

(1) 迫田綾子他、メヂカルフレンド社. 老年看護技術. 2015, pp169-202.

[その他]

ホームページ等 ; URL=pott-program.jp/

(POTT プログラムで公開⇒平成 30 年 2 月 POTT プロジェクトに名称変更)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

迫田綾子 (Sakoda Ayako)

日本赤十字広島看護大学 看護学部
教授

研究者番号 : 70341237

(2) 研究分担者

原田裕子 (Harada Youko)

日本赤十字広島看護大学 看護学部
助教

研究者番号 : 24593274

(3) 連携研究者 なし